

減災講座

Vol. 6

災害情報を生かすには

——リアリティの共同構築

関西大学社会安全学部助教

情報化社会が叫ばれ、情報の量は日々増え続けている。情報の質に対する疑問が生じる場面も散見される。情報の洪水の中で、情報は、知っただけでは意味をなさない。ことに、災害に直面した場面では、情報とどう向き合い、情報をどう生かすのかが、生死を分かつことになる。的確な減災・避難行動のためには、「リアリティ」が集団の中でどのように醸成されているのかをよく理解することが必要不可欠である。

近藤 誠司

Kondo Seiji

京都大学大学院情報学研究所 博士後期課程指導認定退学。博士(情報学)。20年間、NHKでディレクターとして勤務。NHKスベシヤル「MEGAQUAKE」巨大地震」で科学技術映像祭内閣総理大臣賞受賞。徳島大学大学院非常勤講師。人と防災未来センター！リサーチフェロー！

情報を生かす

情報や知識は、ただそこにあって意味をなしません。「知った」だけでは、残念ながらそれまでのこと——もちろん知らないよりも、断然よいのですが——。「ナレッジ、ナレッジ……」と百回唱えても、「インフォメーション、インテリジェンス……」と千回叫んでも、事態は何も改善しません。特に、防災・減災に関する災害情報は、命を守り、命を救い、命を支えるための「命綱」となるものです。その「命綱」が、実際の現場で役に立たないものであるならば——すなわち、「行動・action」につながらないものであるならば——、その情報

は「死んだ」も同然です。それでは、災害情報を「生きた」ものにチェンジするには、どうしたらよいのでしょうか。筆者の考えを先に述べておきましょう。その鍵は、「リアリティ・reality」を共同構築することにあります。

状態+情報
|| リアリティ

ところで、そもそも「情報」という言葉は、明治時代につくられた比較的あたらしい言葉です(*1)。フランスの軍事演習の教科書を翻訳するために案出されました。「敵の状態を報せる」という意味です。したがって、「状態」と書く場

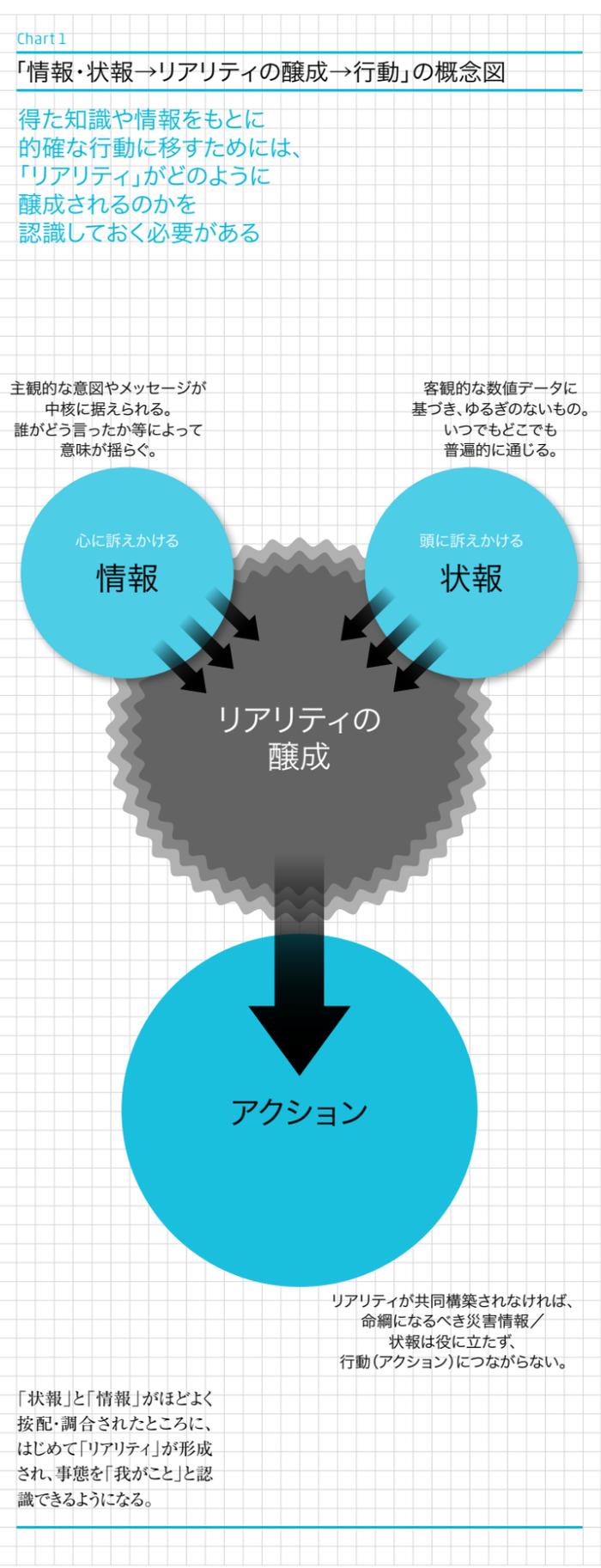
合もありました。一説によりますと、文豪・森鷗外は、「状態」と「情報」を使い分けていたそうです(*2)。

前者、「状態」は、敵の陣形、兵士の数など、客観的な数値データに基づきます。ゆるぎのないものです。一方、後者、「情報」は、「もう、かなり危険です!」といった主観的な意図やメッセージが中核に据えられています。「実際のところ、よくわからないのだけれども……」といった、曖昧なもの、流動的なものさえ含まれます。

「状態」は、原則、価値中立的 (value-neutral) で、一意 (one-meaning) で、いつでもどこでも普遍的に (universal) 通じるもの、それに対して「情報」は、誰が言ったのか、どう言ったのか、なぜそう言ったのか等によって、その意味が大きく揺らぐ——極端な場合、意味が真逆になってしまうことさえ

ある——、極めて文脈依存的 (context-dependent) なものです。このことを、すこし災害に引き付けて考えてみましょう。専門家や行政は、「状態」を好みます。数字をたくさん産出します。被害想定、確率震度分布、耐震化率、雨量、風速、マグニチュード……。まず、冷静に「あたまで」に訴えかけようとしています。しかしメディアは、「情報」を好みます。巨大! 最悪! 倍増! ……。感情を揺さぶります。熱っぽく「こころ」に訴えかけようとしています。

リアリティが共同構築されなければ、命綱になるべき災害情報/状態は役に立たず、行動(アクション)につながらない。



はじめてそこに「リアリティ」が形成されます。ようやく「我がこと」になるといふ次元です。

「ハゲフル」のリアリティ

ひとつ実例を出して、話を進めましょう。「時間雨量50mm」と聞いて、みなさんほどのような「リアリティ」をもつでしょうか。この質問を学生にすると、「60分で5cmの雨水がビミョウに溜まるって感じ!？」という、なんとも「ビミョウ」な答えが返ってきます。あなたが間違っています。ただし「状態」としては、です——単位を変換しただけですからね——。そして、「情報」としては、やはり不足しています。雨水は一様に溜まるわけではありません。窪地や低地には勢いをもって大量に流れ込む危険性があります。だから、ひとことと言って「居場所によっては、危ない!」。これが、学生に回答してほしかった、ひとつの「リアリティ」です。

気象関係者には、「ハゲフル」という言葉があります。「激(ハゲ)しい雨が降る(フル)」、すなわち、「ハゲフル」。この形容レベルが、「時間雨量50mm」を意味しています。業界用語ですが、重要な「craft language(現場で培われた言葉)」でもあります。この言葉が発せられると、現場の空気が引き締まります。そうした「リアリティ」を、迅速・的確に醸成することができます。同じく構築してきたリアルな言葉、現場にいる者同士が共通で構築してきた言葉だからこそ、一斉に「こころ」のスィッチが入るし、もっと言えば、反射的にからだ動く(action)のです。

学生には——なぜだかよくわかりませんが(笑)——、「ハゲフル」という言葉が好評です。「昨日、大阪の雨は、ハゲフル・レベル」だったねえ」と話すと、「じゃあ、おれ、地下街で買い物してたんですが、場合によってはやばかったんですね」と、素直に反応してくれます。よそ行きの「craft language」が徐々に自分のものになっていく。こうして——おそらく「時間雨量50mm」という定義はすっかり忘れていられるでしょうけれども——自分の体験と体感で「ハゲフル」の「リアリティ」をもちはじめます。

ここにもうひとつ、たとえば、行政職員のみなさんが災害対

トラメガ隊による試み

神戸市長田区の真陽地区では、津波避難に際して、「状態/情報」を伝え合うチームを地域で結成しました。名付けて「トラメガ隊」。トランジスタメガホン(トラメガ)を、20ある自治会すべてに配備して、いざというとき、そのトラメガを使って「津波だ! 逃げる!」と呼びかけ合おうというのです。

実際に巨大地震が発生すると、防災無線の屋外拡声器からは、行政による避難の呼びかけが聞こえてくるはずですが、「大津波警報が出ました。高い場所に避難してください」。テレビでもラジオでも、メディアが避難を促すアナウンスをしていることでしょう。「海岸・河口付近には近づかないください。いますぐ高台に避難すること」。これらに加えて、地区に住んでいる顔見知り(トラメガ隊員)の声の背中を押してくれます。「津

神戸市長田区の真陽地区

は、津波避難に際して、「状態/情報」を伝え合うチームを地域で結成しました。名付けて「トラメガ隊」。

(*1) 小野厚夫「情報という言葉を探る」(2)「情報処理」46巻5号、475、479頁、2005年、情報処理学会
(*2) 大島進「鵜外森林太郎による獨逸語 NACHRICHTENの二つの翻譯語「情報」と「状態」、情報処理学会第40回(平成2年前期)全国大会、28、29頁
(*3) 岡田弘・宇井忠英「噴火予知と防災・減災」火山噴火と災害」79、116頁、宇井忠英編、1997年、東京大学出版会
(*4) 「大火砕流に消ゆ」雲仙普賢岳・報道陣20名の死が遺したもの」江川紹子著、2004年、新風舎文庫
(*5) 「有珠山火の山ととも」岡田弘著、2008年、北海道新聞社

応に悪戦苦闘している現場の様子を垣間見る経験などが加われば、より真剣に、より切実に、「ハゲフル」の緊張感を構築することができるようになるでしょう。

リアリティの共同構築

火山学の知見に、「減災の正四面体」という理念モデルがあります。専門家、行政職員、メディア、そして地域住民の

四者を「正四面体(equilateral tetrahedron)」の頂点に置いて、関係当事者間の相互の連携が緊密であることが重要だと説くアプローチです(*3)。雲仙普賢岳の噴火災害(1991年)では、この関係性がうまく確立できず、大勢の犠牲を出しました。たとえば、「火砕流」という現象の危険性に関して、専門家は、確かに行政職員や報道関係者にレクチャーをして(伝えて)いました。しかし、その危険の度合い、恐ろしさの「リアリティ」は共有されて(伝わって)いませんでした(*4)。

そこで、有珠山の噴火災害(2000年)では、専門家が、まず行政職員と報道関係者に、ひざを突き合わせて何度か何度も説明をおこない、信頼関係を築いていきました(*5)。それをふまえて、行政当局は堅実に広報をおこない、メディアも努めて冷静に報道し、地域住民の早期避難を実現させました——全員、無事でした——。あたまで理解してもらったための「状態」を、専門家はできる限り提示しました。そのうえで、「こころ」で腑に落ちてもらったための「情報」も発信しました。どうかみんな本気で逃げてほしい。今まさに危機が迫っているのです……と。

こうした取り組みを、筆者は「リアリティの共同構築」のアプローチと呼んでいます。単に「状態/情報」を伝達しあうクールの「連携」だけでなく、もうすこし互いに歩み寄って、ともに「リアリティ」をつくっていくホットな「連帯」の構えです。通常は、「減災の正四面体」の線分を行き交う「状態/情報」の内容——それが、正しいのか間違っているのか等——に目を奪われがちですが、それだけではなくて、線分で囲まれた空間にどんな「リアリティ」が醸成されているのか、これを最重要視していこうという方略です。

波だ! 逃げる! 「みんな! 急げ!」 「みんなで助かろう!」。これも、「リアリティ」を共同で構築する「連帯」の形です。

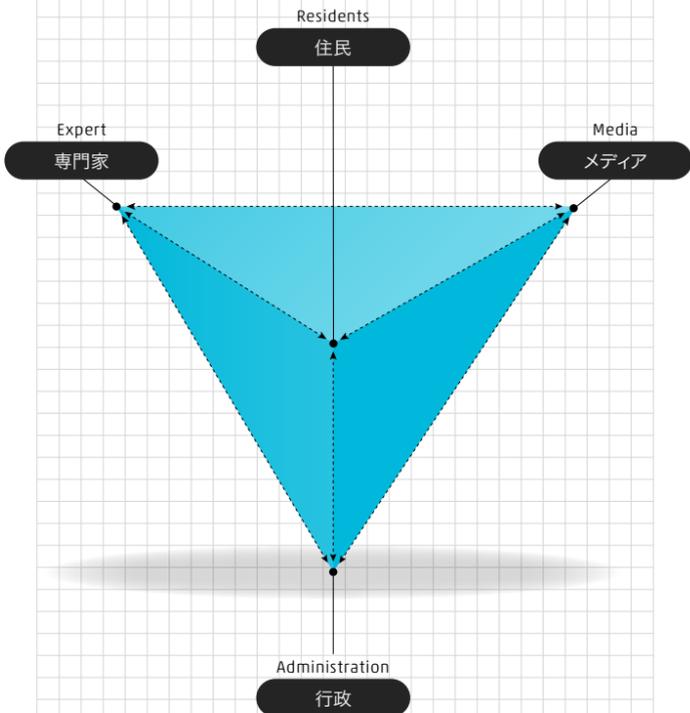
みんながみんなが

情報化社会が叫ばれ、情報の量は確かに増え続けています。情報の質が担保されているのか、疑問が生じる場面も散見されます。そうした議論の蓄積の上に、さらに総体として、どのような「リアリティ」が共同構築されているのかを、みんなが、相互に検討しあう。このような構えを、みんなが、もつことが、情報を、生かす。上で必要不可欠だと思うのです。

本講義シリーズのキー概念となってきた「Save Ourselves」の理念には、ぜひ前述した「リアリティ」——この文脈では、social realityとしたほうが理解しやすい人もいるでしょう——の「共同構築(joint-construction)」の観点も加えていただければと思います。

Chart 2 「リアリティ」の共同構築モデル

正四面体内の空間に、どのような「リアリティ」が醸成されているのかを最重要視する構え



専門家、行政職員、メディア、そして地域住民の四者を「正四面体」の頂点に置いて、関係当事者間の相互の連携が緊密であることが重要だと説く、火山学の知見をもとにしたイメージ図。「状態/情報」を伝達しあうクールの「連携」だけでなく、関係四者間の緊密な「連帯」によって、ともに「リアリティ」をつくっていくことも示している。